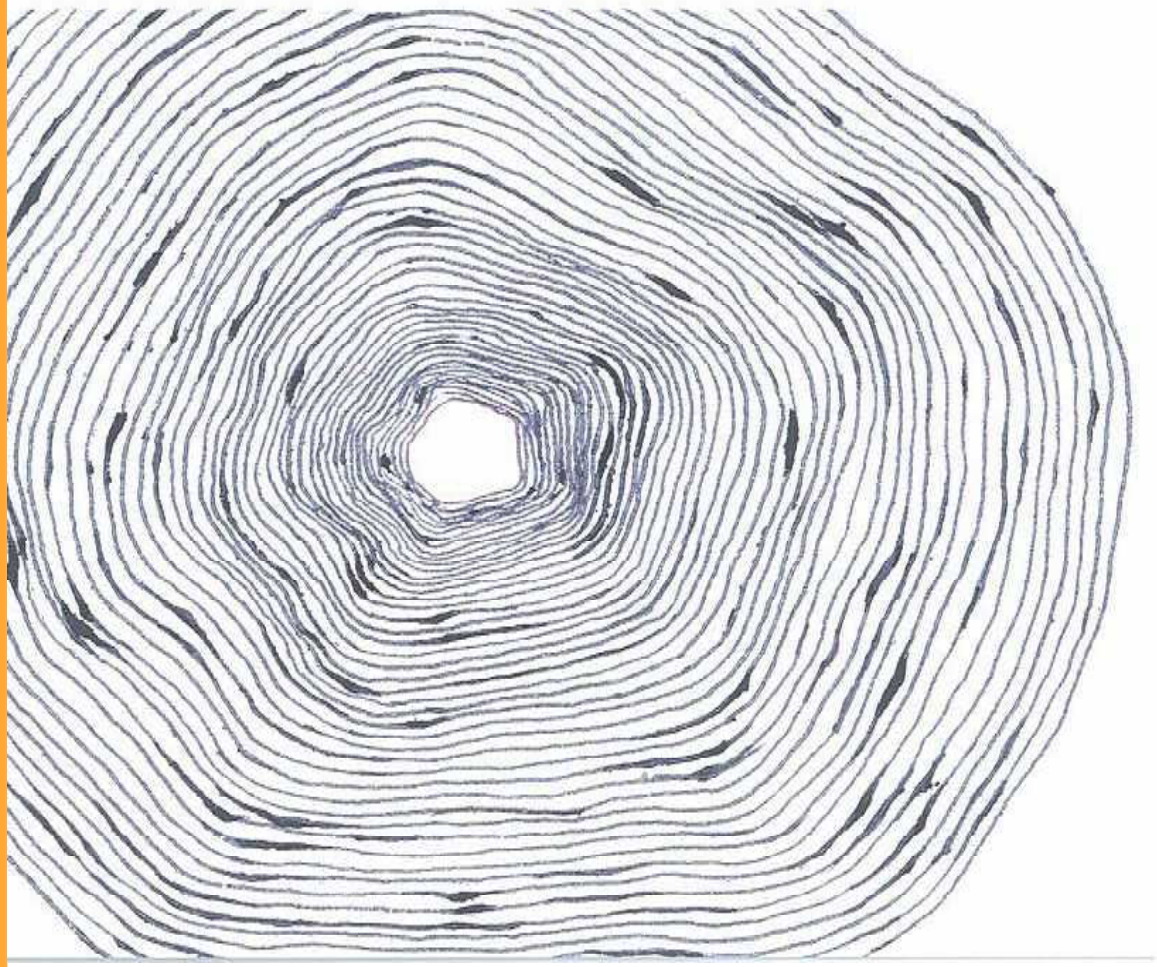
Action Research Center for Human and Community Development

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University

Annual Report 2007-2008

Annual Report 2007-2008



SUEMOTO,TAMOTSU

神戸大学人間発達環境学研究科
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

ANNUAL REPORT
2007-2008年度

Contents

目次

Director's Review
センター長挨拶 03

Action Research
2007-2008年度実践的研究の内容 04

Outline
センター概要 10

Co-workers
運営協力者・共同研究者 11

Topics
2007-2008年度プロジェクト 12

Outline of each section
各部門の概要 16

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター年次報告書　第3号
発行責任者　青木　務　発行年月　2008年10月

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター
2007-2008年度 スタッフ一覧

センター長
青木　務（発達科学部長・兼任）

子ども・家庭支援部門
伊藤　篤（専任研究員・教授）

障害共生支援部門
津田　英二（専任研究員・准教授）

ジェンダー研究・学習支援部門
朴木　佳緒留（専任研究員・教授）

ヘルスプロモーション部門
川畑　徹朗（専任研究員・教授）

ボランティア社会・学習支援部門
松岡　広路（専任研究員・教授）

労働・成人教育支援部門
末本　誠（専任研究員・教授）

プロジェクト研究部門
■市民科学に対する大学の支援に関する実践的研究 リーダー
伊藤　真之（発達科学部　環境基礎論）

事務局

■ヒューマン・コミュニティ創成研究センター　専従事務スタッフ
高尾　千秋（2007年度）　千葉　佳代子

■現代GP・大学院GP　事務局スタッフ
高尾　千秋　木村　純子
寺村　ゆかの　大久保　正彦
中谷　彩一郎　田中　美子

■のびやかスペースあーち　専従事務スタッフ
中西　美智子　橘　京子　渡辺　知津子
佐原　和美　寺村　ゆかの（2007年度）

表紙イラストレーション：末本保　編集：千葉佳代子　編集責任者：川畑徹朗

Director's Review　*センター長挨拶*

青木　務　（発達科学部長・兼任）

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、2005年４月１日に総合人間科学研究科の附属施設として発足、教育・研究の基礎となる発達科学部が2007年４月１日に大学院化されたことに伴い、総合人間科学研究科の名称を人間発達環境学研究科に改め、当センターも人間発達環境学研究科の附属施設として再出発しました。

当センターは、大学が地域や学校、行政、企業等と協働しながら、人間らしさあふれるコミュニティの創成を目指したさまざまな実践的研究を行うことを目的としています。発達科学部とその大学院である人間発達環境学研究科では、従前より、人間の発達と発達を支える環境について教育、研究してきましたが、その全体を覆うキーワードがヒューマン・コミュニティ創成研究でありました。このようなキーワードを冠したセンターを創設したことは、学部や研究科の特色を明示するという意味もありますが、それだけにとどまらず、今日の時代的、社会的要請に積極的に応えたいという私たちの思いをかたちに表したということでもあります。

科学技術の発展や地球規模でのグローバル化は私たちの生活を大きく変化させ、暮らしの利便性、快適性を増しました。ところがその他方では、改めて、人間らしい生活や環境とは何か、人間らしい発達とはどのようなことか、という素朴で根源的な問題を問わざるを得ない事態も生まれました。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、人間と人間のつながり・人間と環境のつながりに注目し、今世紀にふさわしい「人間らしさ」を追求する拠点でありたいと願っています。

スタッフの最近の活動を紹介します。当センターのスタッフ等による「再チャレンジ！女性研究者支援神戸スタイル」が、文科省の「女性研究者支援モデル育成」事業に採択されました。また、現代的教育ニーズ取組支援プログラム（持続可能な社会につながる環境教育の推進）に、「アクション・リサーチ型ＥＳＤの開発と推進」と名付けて応募した事業が採択され、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）に関係する種々の教育活動を行っています。

さらに、大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」にも採択され、大学院生の正課外活動を積極的に支援しています。

2005年9月には、旧灘区役所の跡地を借用し、当研究科のサテライト施設「のびやかスペース あーち」を設置しましたが、この施設はまさに「街に出る大学」の先端に位置するものであります。当施設では、「子育て支援をきっかけとした共生のまちづくりの拠点」として、社会、地域と密着した実践的な研究活動を行っています。

本アニュアルレポートはヒューマン・コミュニティ創成研究センターおよびサテライト施設での2007年度と2008年度前半の実践・研究を記録したものです。私たちが「街に出る大学」として、この１年あまりにわたって何を行ったのかを記載しました。多くの皆様方から、忌憚のないご意見やご叱正、さらにはご支援をいただくことができれば何よりの幸いに存じます。

Action Research

実践的研究の戦略

私たちの取組む実践的研究は、研究者や実践者の多様なネットワークをつくることが基本です。この姿勢はHCセンターの本質に他なりません。ネットワークの力を得ながら、「プログラム・モデル開発」「実践者支援」の２つのカテゴリーに分類できる多様な実践を構築していきます。そして、その実施を通して、さらに新しいネットワークの形成を図っていきます。**「ネットワーキング」→「プログラム・モデル開発」「実践者支援」→「ネットワーキング」**という循環を重ねることで、実践的研究の共同体（AR共同体）をつくっていくことが、私たちの基本戦略です。

このような実践的研究の遂行によって、HCセンターのミッションである、さまざまな組織や個人と連携しながら、人間性にあふれた多層・多元的なコミュニティの創成を目指します。

ＨＣセンターのミッション

さまざまな組織や個人と連携しながら、人間性にあふれた
多層・多元的なコミュニティの創成を目指す研究の遂行

１．ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ･ﾓﾃﾞﾙ開発

特定の社会的課題を解決する手法として、人間の発達や認識変容を促すプログラムの開発を行っています。プログラム・モデル開発の効果は、プログラム実施の成果ばかりでなく、プログラム作成や実践組織の組織化、プログラム実施の中で起こる非意図的な副次的効果も重要だと考えます。

そこで、プログラム・モデルを次のような幅広い視点から追究します。

- ■プログラムが前提にしている価値についての原理的な探究
- ■プログラムと当該の社会的課題との関係の記述と分析
- ■プログラム実施のための条件づくりについての記述と分析
- ■プログラムを実施した際の効果測定
- ■反省的事例も含めたプログラム作成過程の記述と分析
- ■汎用可能なプログラム・モデルの開発

２．実践者支援

人間の発達を支援する人たちや、学習者、ボランティア等の活動を支援することを通して、実践者のエンパワメントを目指すとともに、実践者支援の方法、実践の意味づけや課題について追究します。

- ■実践者に必要な技能や知識に関する追究
- ■実践者の社会的位置や心理・価値の内在的分析
- ■実践者支援プログラムの開発・実施・効果測定
- ■実践者支援の多様な方法についての考察
- ■実践者支援を通した研究成果の実践化と普及

実践的研究の共同体

３．ネットワーキング

特定の社会的課題をめぐって、組織や個人のネットワークを形成することで、多元的な新しい実践的研究のフィールド創成を目指しています。ネットワーキングは、実践的研究の基盤整備という意味もありますが、そればかりでなく、新しい実践を生み出したり、新しい課題を提示したりするというネットワーキング自体のもつ価値にも着目します。

1. プログラム・モデル開発

喫煙，飲酒，薬物乱用防止教育プログラムの開発（ヘルス）

ライフスキル形成を基礎とする喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育プログラムの中学生版（レベル１、レベル２、レベル３）を完成し、出版した。また、2007年度からは小学校高学年を対象としたプログラムの開発と、その有効性に関する評価研究に着手した。

性教育プログラムの開発（ヘルス）

ライフスキル形成を基礎とする性教育プログラムの中学生版の開発研究に着手し、現場の中学校教師や指導主事と協同して、１年生の指導案の一部を作成した。

ライフストーリーを応用した書の社会的意義に関する実践的研究（労働・成人教育）

国際文化学部の魚住和晃教授と共同で、知的障害のある成人を対象にした書の講座を開催した（前年度からの引継ぎ）。これまでのこの取組を基に方法論として仕上げ普及するために、「筆跡表現の社会的広がり」（誌上シンポジウム『現代社会の中の「書」と未来』所収）が出版された。また、これまでの活動で収録されたヴィデオテープを学部授業の支援論研究において活用し、20分程度のDVD（『心の象形――書を通しての自己表現』）に仕上げ、関係各方面に提供された。

教師のためのセクシュアルハラスメント防止研修プログラムの開発（ジェンダー）

ロールプレイを取り入れた参加型研修プログラムがほぼ完成した。2007年度には試行のための実践を行った。部門研究員の大多数が出かけて実施した試行を２回、自治体や教育委員会主催の教員研修を３回行った。そのいずれにおいても、「セクハラ防止」と「教育課題」を結合し、「人間理解」を深めるような内容とした。これらをＨＣセンターまたはジェンダー研究・学習支援部門のうちに留めることなく、公開したいと願っている。

「お母さんのためのゆっくり・解放プログラム」開発（ジェンダー）

2006年度に「のびやかスペース あーち」で実践したリフレッシュプログラムを発展させ、「子育て支援」プラスプログラムを開発するための試行を実施した。プログラムとしては未だ開発途上であり、成果を示すことは難しいが、すでにファシリテーターとして実践している市民との協働関係をつくることができた。

アウトリーチ事業「妊娠期からの家庭支援プログラム」（子ども・家庭）

前年度にその効果が実証された本事業を、2007年10月以降、あらたなアウトリーチワーカー（助産師2名）を雇用して本格的展開を開始した。神戸市灘区内にある産科施設と連携し、相談、家庭訪問、子育て関連資源への同行・参加を通して、妊娠中からの女性および家庭のエンパワーメントを目指した支援モデルの提示を目的とした「のびやかスペース あーち」の事業である。本事業の実施にあたっては、平成19年度 神戸市地域子育て拠点支援事業「ひろば型」助成金の一部を利用した。

ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」「1～2歳児のパパママ交流会」（子ども・家庭）

2006年度から「のびやかスペース あーち」で開始した月齢・年齢に応じた親としてのあり方を学ぶ（男性の育児への参加促進も視野にいれた）プログラムである。2007年度、「0歳児のパパママセミナー」は5月～12月（月1回 8月を除く）に計7回実施され、2006年度の0歳児のパパママセミナー参加者が集まる「1歳児のパパママ交流会」は2007年1月以降ほぼ毎月実施されている。2008年度にも神戸市灘区保健福祉部の協力を得て、受講者を新規募集し、「0歳児のパパママセミナー」を5月以降実施していると同時に、2006年度と2007年度のパパママセミナー参加者のための継続的支援プログラムとして「1～2歳児のパパママ交流会」を毎月開催している。

次世代育成事業「赤ちゃんふれあい体験学習」（子ども・家庭）

2005年度・2006年度に引き続いて、神戸市からの委託・助成（平成19年度 命の感動体験）を受け、神戸市灘区保健福祉部、神戸市教育委員会（灘区内の中学校長会）との連携によって「のびやかスペース あーち」で実施した次世代育成学習プログラムである。学習者は灘区内の公立・私立中学生であり、ふれあいの協力者は「0歳児のパパママセミナー」の受講者と赤ちゃんであった。2007年5月～12月（月1回 8月を除く 計7回）にわたる長期的な学習の効果を検討した。

ESDモデル開発「ESDボランティア塾ぼらばん」事業（ボランティア）

ESD（持続可能な開発または社会づくりのための教育）のモデルとして、インフォーマルな活動の組織化を企図した「ESDボランティア塾ぼらばん」事業を創始した（４月）。13の阪神間のNPO（子育て支援・まちづくり・障害者支援・国際協力など）の協力を得て、螺旋型学習プログラムをデザイン・運営し、実施上の課題を検討した。主催事業として、夏プロ：ワークキャンプ（8月13日～18日）・秋プロ：活動デザインワーク（10月27日）・冬プロ：ふりかえりワーク（1月5日、6日）・秋プロ：ふりかえり・創出ワーク（3月14、15日）を行うとともに、半年間、各団体の日常活動へのボランティア参加を促す選択的活動プログラムを実施した。参加者は高校生・大学生・ＮＰＯ関係者。

居場所づくりプログラム（障害共生）

インクルーシヴな地域社会に向かうための拠点として毎週金曜日の午後に「のびやかスペース あーち」で実施。自分だけでは遊びを展開できない障害のある子どもが、他者との関わりの中で十分に参加し、楽しむことができるための支援を中心としている。「あーち」の他のプログラムとも一体化して、障害のあるおとなや保護者、障害のないおとなや子ども、ボランティアなどが集まり、楽しみながら相互の関係づくりをしている。また、インクルーシヴな場面がどのように展開していくかということなどをテーマとした、アクションリサーチの場でもある。

音楽の広場（障害共生）

「のびやかスペース あーち」で月１回実施している音楽プログラム。音楽の力を最大限に引きだすことのできる場をつくり、参加者相互の関わりを活性化することで、「共生」の理念に近づくことを目指す。「あーち」での他のさまざまなプログラムとの相乗効果もあり、多様な関係形成の場となっている。音楽に関心や理解の深い学生や卒業生がプログラム開発に参画している。

アートを介した共生のまち創成（障害共生）

「のびやかスペース あーち」において、さまざまな芸術家などの協力を得ながら、地域文化の継続的な活性化支援を行った。特に月３回の金曜日は定期的に自由な造形の場をつくり、主に子どもたちの表現活動の展開を見守っている。また、地域において表現活動を支援する人たちの養成も試み、実践の場の広がりを図ろうとした。

博物館機能を生かした共生のまち創成（障害共生）

「のびやかスペース あーち」において、地域社会に即した新しい価値の創造を目指す博物館実践を試みている。07年度は、知的障害のある人たちの作品展、学生のパフォーマンス、自然史展、平和展などを行った。これらの大半は、神戸大学発達科学部博物館学芸員資格課程との連携事業である。

市民科学に対する大学の支援に関する実践的研究（プロジェクト研究）

科学に関わる課題領域で、市民のエンパワーメントの社会的しくみのモデルを構築することを目指して、平成17～19年度プロジェクト研究を行ってきた。第一段階として、市民と科学者の対話の場としてサイエンスカフェの開催を進めてきたが（別項参照）、平成19年度には第２段階として、市民と研究者や学生の協働の場としての神戸大学サイエンスショップの開設に発展し、地域の環境課題、科学教育などへの取組の支援を展開している。

2. 実践者支援

「健康教育ワークショップ」（ヘルス）

思春期の危険行動の防止に関心を持つ専門職を対象として、ライフスキル形成を基礎とする健康教育の理論と実際について体験的に学び、指導に際して必要なスキルを形成することを目的としたワークショップを、各地の教育委員会や学会と連携して開催した。

「専門職等」支援（子ども・家庭）

国立女性教育会館が主催する「平成19年度 家庭教育･次世代育成のための指導者養成セミナー（2007年5月）」、「家庭教育・次世代育成地域協働フォーラム（2008年2月）」、「平成20年度 家庭教育・次世代育成のための指導者養成セミナー(2008年5月)」などにおいて、全国の子育て支援関連の専門職や実践家を対象としてセミナー講師・コーディネーター等を務めた。

新規就農者を対象とした『農業・知る場カレッジ』への支援事業（労働・成人教育）

部門の研究活動として、兵庫県龍野農業改良普及センターで担当職員の北郁雄氏が中心になって取り組んだ、『農業・知る場カレッジ』についての実践研究をした。新規就農を希望する受講生にライフ・ストーリーを応用するプログラムを組んだ北氏にそのつどの進捗状況の報告を受け、その実施の過程や成果の評価について実践的な研究を行った。

昭和初期の六甲山の生活を語る会への支援活動（労働・成人教育）

研究員の堂馬英二氏が主宰する「六甲山自然保護センターを活用する会」の活動である、「六甲山の生活を古老に聞く」というプロジェクトを支援し、昭和初期の六甲山に関係した当時の暮らしを知る高齢者への聞き取りに協力した。

福祉教育実践研究隊事業（ボランティア）

京都府社会福祉協議会と協働し、「福祉教育実践研究隊（旧福祉教育キャラバン隊）」の活動を行った。福祉教育の実践現場を部門研究員、社会福祉協議会職員とともに訪問し、福祉教育推進体制・プログラムについて検討した。当事者性の高まる実践のありようについて協議し、日本福祉教育・ボランティア学習学会への発表を予定している。

知的障害のある人たちのセルフアドボカシー支援（障害共生）

知的障害のある成人が社会にある矛盾を認識し、それを社会に対してアピールしていく活動を組織化し支援している。特に、自分たちの生活世界を地域に伝えることを目的とした新聞発行支援を行っている。

3. ネットワーキング

ネットワーキング・イニシアティブ

神戸大学「男女共同参画推進室」との協働（ジェンダー）

2007年7月31日に、神戸大学では初めての「男女共同参画シンポジウム」が開催された。同シンポジウムでは板東久美子内閣府男女共同参画局長、広岡守穂中央大学教授の他、相馬芳枝特別顧問による講演があり、学内外の２２０名の参加者を得て、大学における男女共同参画について意見交換した。男女共同参画推進室の活動はジェンダーに関係する専門的知見を必要としており、ＨＣセンターと協働関係にある。

成人教育に関する異業種交流の推進（労働･成人教育）

昨年度からの本部門の基本的な活動として、成人教育に関わる多様な「現場」の教育的支援を本務とする関係者の交流を基にした、成人学習の原理に関わる実践的な研究活動に取り組んでいる。公民館・企業・コンサルタント・組合関係・農業改良普及員・放送大学関係者など、本来関係がないと思われている領域の教育的職員が参加して、それぞれの経験を交流しながら、ライフ・ストーリーを共通の方法論として実践的に成人の学習についての研究に取り組む活動を、定例の研究会として展開した。

ドロップイン事業「ふらっと」（子ども・家庭）

当部門が「のびやかスペース あーち」において基盤プログラムと位置づけている「ドロップイン（ひろば）」事業（火曜から土曜の週5日 10:30～16:30）」は、数多くの地域リソース（組織や人材）によって支えられている。相談員に関しては（2007年度・2008年度）、神戸市灘区保健福祉部・社会福祉協議会、神戸市地域子育て支援センター灘（おひさま）、神戸市灘区内公立保育所（７ヵ所分室を含む）、神戸市東灘区NPO法人マザーズサポーター協会からの協力を得ている。「ふらっと」の利用者を対象として開催した2007年度「秋の特別セミナー」講師に関しては、ホームスタート･インターナショナル事務局（英国）、ろっこう医療生協東雲診療所、岡山大学教育学部、神戸大学発達科学部からの協力を得た。なお、本事業の実施にあたっては、2007度 神戸市地域子育て拠点支援事業「ひろば型」助成金の一部を利用した。

ESDボランティア育成プログラム推進ネットの運営補助（ボランティア）

2006年12月に創設されたESDボランティア育成プログラム推進ネットの会議・学習会・連絡会の運営を補助する役割を担った。4月から始まった「ESDボランティア塾ぼらばん」事業に関する支援活動だけではなく、ボランタリズム協働セミナーやNPO連絡会議の運営に関する実務を担った。

少子化問題研究部会（子ども・家庭）

2006年度に引き続き、神戸大学経済経営研究所と兵庫県による「少子化問題に関する調査・研究についての協力協定書（2006年11月18日）」にもとづく少子化問題研究部会の研究員として、研究会での発表を行った（2007年5月15日）。また、同研究部会が主催したフォーラム「総合化に向かう少子化対策」にのびやかスペース あーち」担当の教育研究補佐員がパネリストとして登壇した（2008年3月27日）

日韓交流学術シンポジウム（障害共生）

2008年2月2日に、韓国から研究者、実践者の参加を得て、「当事者性を育てる」と題したシンポジウムを実施した。セルフアドボカシーの動向、韓国福祉館の可能性、大学の役割などについて議論を行った。公開シンポジウムであるため、各地から知的障害のある人たちの地域生活支援に関わる人たちが集まり、ネットワーク形成がなされた。

研究会活動（ヘルス）

ワークショップの参加者（教諭，養護教諭，栄養士，大学教員等約250人）で構成する研究会を組織し、ニュースレターの発行（年４回）、各地での学習会の開催などの活動を行っている。

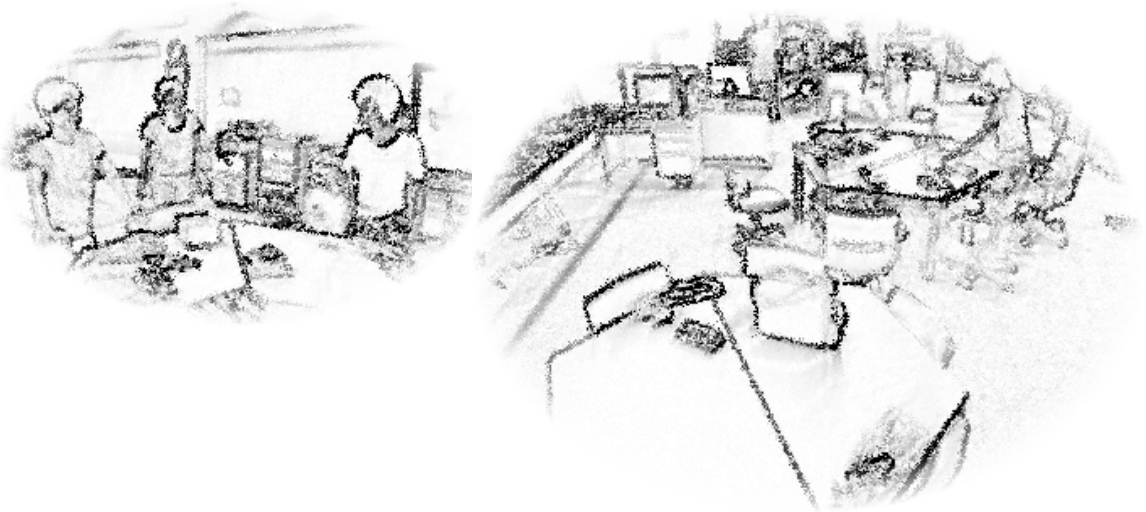
その他

大学院ＧＰ「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」事業支援　（全部門）

2007年度に採択された人間発達環境学研究科の大学院GPの実質的なマネジメントを担当している。全部門の協力の下、学内の委員会活動や学外の学術活動および学外の実践活動に対して、院生が参加しやすい環境整備を行うことを目的に、そのコーディネートを行ってきた。GP期間（～2009年度）、支援活動を継続して行く。

現代ＧＰ「アクション・リサーチ型ESDの開発と推進」支援事業　（全部門）

文部科学省の現代GPプログラムに採用された上記事業は、発達科学部と文学部、経済学部が協力して取り組んでいる。当センターは、このプロジェクト全体を進める拠点になっている。またこの事業の実施は、HCセンターがこの間蓄積してきた学外の協力団体との連携をさらに発展させるものである。（2007年～2009年度の事業）



連携・協力

- 福島県、福岡県、三田市、新潟市、福山市などの教育委員会と共同して、ヘルスプロモーションの指導者養成のためのワークショップの開催や、プログラムの有効性評価のための研究活動に取り組んだ。（ヘルス）
- 神戸市より、放課後児童健全育成事業計画検討委員会の委員長（前年度から継続 2007年7月まで）を委嘱された。（子ども・家庭）
- 兵庫県より、阪神こどもの館（仮称）基本計画検討委員会の委員（2007年6月～2008年3月）を委嘱された。（子ども・家庭）
- 兵庫県より、平成 19 年度兵庫県幼児教育推進会議の委員（2007 年 10 月～2008 年 3 月）を委嘱された。（子ども・家庭）
- 神戸市社会福祉協議会より、神戸市総合児童センター運営委員会の運営委員（2008年4月～2010年3月）を委嘱されている。（子ども・家庭）
- 大阪市「クレオ大阪中央研究室」の運営に協力した。（ジェンダー）
- 伊丹市男女共同参画市民オンブードの活動に協力した。（ジェンダー）
- 文部科学省より「新教育システム開発プログラム事業」の委託を受けた（株）キャリアリンクが実施した「ネットワーク型教員養成のあり方についての調査研究」に協力した。（ジェンダー、子ども・家庭）

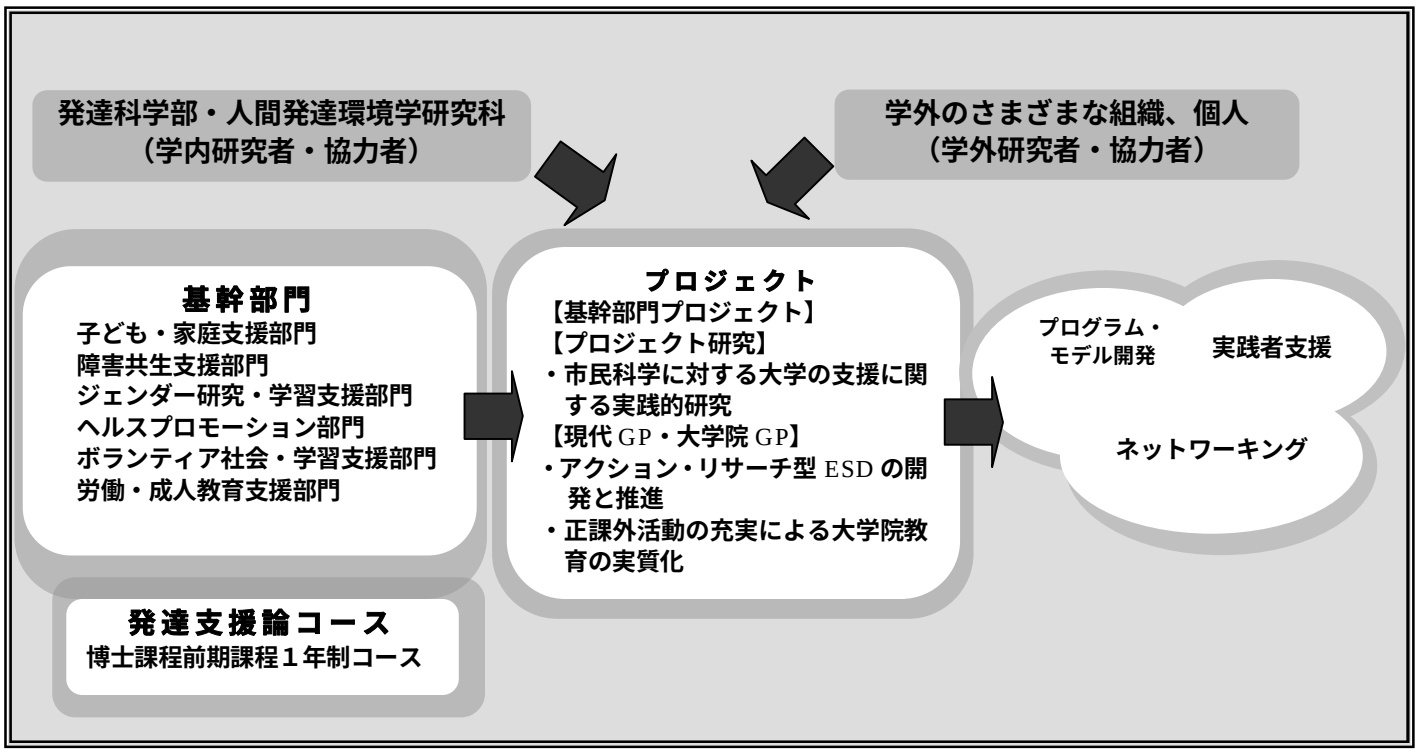
Outline　*センター概要*

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（H Cセンター）とは

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）とは、神戸大学大学院人間発達環境学研究科に設立された発達支援インスティチュートのもとにあり、これまで蓄積されてきた研究成果と、地域などですでに行われている実践との間に、太いパイプをつくっていこうとするものです。人間の発達支援に関わる活動を行っている地域組織、NPO、NGO、企業、行政、学校等の人々と連携しながら、研究・実践を深め、人間性にあふれた多層・多元的なコミュニティの創成を目指します。

HCセンターには６名の専任教員がおり、それぞれ基幹部門を運営しています。６つの基幹部門ではさまざまなプロジェクトを展開しており、プロジェクト研究、現代ＧＰ、大学院ＧＰ（2007年度現在）が加わって、HCセンターの多様な実践的研究を構成しています。各プロジェクトは、リーダーと学内および学外の研究員・協力員が担っています。

また、すでに企業、自治体、学校、NPOなどで活躍中の社会人を対象とした※１年制修士課程も設けられています。発達支援に関する、さらに高度な実践的、専門的な知識や技法のスキルアップを行い、現代的課題に対応する社会活動に資する人間の育成を目指しています。



※１年制修士課程とは

HCセンターと密接に関連する大学院として「１年制履修コース」があります。このコースは、「ヘルスプロモーション」「子ども・家庭支援」「ボランティア社会・学習支援」「障害共生支援」「労働・成人教育支援」「ジェンダー研究・学習支援」のいずれかの領域の実践活動の実績をもつ社会人を対象としています。学生はすでに行ってきた実践活動をより広い視野の下でまとめ、考察することにより、修士の学位を取得することができます。

授業は基本的に夜間に開講し、HCセンターで行っている実践的研究に関わりながら１年間で所定の単位を取得した上で、リサーチペーパー（修士論文）を提出することが求められます。

社会的実績をもとにした学位（修士）を得たい方、自らの実践活動の成果をまとめて一層の前進をはかりたい方は是非、ご応募ください。

（詳細は学生係まで問い合わせ願います。電話：078-803-7924）

Co-workers　　*運営協力者・共同研究者*

学外協力者

新崎国広　(大阪教育大学)
池田真理子　(福山市教育委員会)
石崎和美　(ＮＰＯ心のサポート・ステーション)
石原勝利　(久御山町社会福祉協議会)
一橋和義
伊藤斉子　(大阪リハビリテーション専門学校)
岩澤奈々子　(川口市立榛松中学校)
植戸貴子　(神戸女子大学)
大澤欣也　(伊丹市児童虐待防止市民ネットワーク会議)
大本晋也　(兵庫県教育委員会社会教育課)
小河洋子
折出健二郎　(貝塚市立中央公民館)
片岡正純　(綾部市社会福祉協議会)
片倉佐知子
勝野眞吾　(兵庫教育大学)
川崎孝生
川谷和子　(ハーベスト医療福祉専門学校)
北　郁雄　(南淡路農業改良普及センター)
小林　繁　(明治大学)
小林未佳　(ＮＰＯ法人子ども未来研究所)
坂井　満　(朝倉市立秋月中学校)
坂井知子　(川口市立南中学校)
佐々木寛　(広島市立瀬野川中学校)
佐藤恵子　(川口市立十二月田中学校)
末本やすみ
杉原妙子　(大阪市立高見小学校)
須田　和　(尼崎市立女性・勤労婦人センター)
砂田枝里
関根幸枝　(鉾田市立巴第一小学校)
桒原英文　(ＪＰＣom)
髙島　昭　(兵庫県農林水産部農林水産局)
高瀬優子
高橋真琴　(宝塚市立養護学校)
竹内伸宜　(神戸海星女子学院大学)
田實千絵　(ＮＰＯ法人子ども未来研究所)
田中賢作　(フリースペース「SAKIWAI」)
丹内裕美　(胎内市立乙中学校)
寺地邦子　(伊丹市立鴻池小学校)
堂馬英二　(ワークスタイル研究所)
徳永桂子
冨永貴公　(あかねが丘学園)
名賀　亨　(華頂短期大学)
長澤雅江
中林洋亮　(京田辺市社会福祉協議会)
並木茂夫　(財団法人日本学校保健会)
西岡伸紀　(兵庫教育大学大学院学校教育研究科)
西村いつき　(兵庫県豊岡農業改良普及センター)
西山こずえ
沼館園子
沼館和明
野口　緑
能勢伸子
橋本久仁彦　(プレイバックシアター)
濱田格子　(伊丹市立婦人児童センター)
林　敬子　(神戸海星女子学院大学)
原田正樹　(日本福祉大学)
春木　敏　(大阪市立大学大学院生活科学研究科)
久井英輔　(兵庫教育大学　教育・社会調査研究センター)
福田悦子
藤井良三　(神戸海星女子学院大学)
頼田　稔
渡邊一真　京都府社会福祉協議会

学内協力者

【教員】
石川哲也
稲場圭信
岩佐卓也
太田和宏
木下孝司
澤　宗則
白杉直子
白水浩信
中村稔尭
中村晴信
二宮厚美
目黒　強
森岡正芳

【学生】
今出友紀子
大藪明子
久門加代子
清水伸子
沼田里衣
原田賢明
渕田陽子
小林洋司

岸本佳子（発達科学部附属幼稚園）
喜多淳子（医学部）
高田　哲（医学部保健学科）
本間康浩（工学部）

研究・実践のさらに詳しい情報を知りたい方は、下記の媒体をご参照いただけます。

・伊藤篤（2007）「柔軟なｾﾙﾌ･ｴｽﾃｨｰﾑと自立性」『児童心理 2007 年 7 月号（特集：自尊感情を考える）』　24-29 頁　金子書房
・伊藤篤（2007）「福祉教育・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ学習における評価手法の基礎的検討（第Ⅰ部　特集論文 2)」『福祉教育・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ学習の評価』日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 12 巻　30-50 頁　万葉舎
・Atsushi ITO (2008) Plant Management as Action Research and Social Contribution in Supporting Child and Empowerment. The Proceedings of the 1st International Academic Interchange Meeting between the Graduate School of Human Development & Environment (HDE), Kobe University and the Institute of Education (IOE), University of London; The Contribution of University to Civil Society, 70-78.
・伊藤篤（2008）「地域によって支援される人間発達－子ども発達支援を事例として－（第１章 第２節)」『発達科学への招待（神戸大学発達科学部「発達科学への招待」運営委員会編)』34-47 頁　かもがわ出版
・伊藤篤（2008）「いのちを実感し親になることを考える体験学習」ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ（Ⅰ～Ⅲ）事業評価報告書」　2007 年度神戸市委託事業報告書（全 143 頁）
・伊藤篤（2008）「少子化問題に対応する一方策としての地域ﾌﾟﾛﾌｧｲﾘﾝｸﾞとｾﾝﾀｰ運営」『総合化へ向かう少子化政策（H19 年度成果報告ﾌｫｰﾗﾑ)』神戸大学経済経営研究所・兵庫県・兵庫労働局編　52-56 頁
・伊藤篤（2007）2006 年度 神戸市委託事業報告書「いのちを実感し親になることを考える体験学習」ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ（Ⅱ）報告書　神戸大学大学院総合人間科学研究科 ﾋｭｰﾏﾝｺﾐｭﾆﾃｨ創成研究センター 子ども・家庭支援部門報告書　全 28 頁
・JKYB 研究会（代表　川畑徹朗）編著：「未来を開く心の能力」を育てる、JKYB ﾗｲﾌｽｷﾙ教育プログラム．東山書房，2007．
・川畑徹朗、石川哲也，勝野眞吾他：中・高校生の性行動の実態とその関連要因-ｾﾙﾌｴｽﾃｨｰﾑを含む心理社会的変数に焦点を当てて-．学校保健研究，2007；49(5)：335-347．
春木　敏，川畑徹朗，西岡伸紀他：ﾗｲﾌｽｷﾙ形成に基礎をおく朝食・間食行動に関する教育プログラムの有効性を評価するための意志決定スキル，目標設定スキル尺度の開発．学校保健研究，2007；49(3)：187-194．
・津田英二編（2007）『ｲﾝｸﾙｰｼﾞﾌﾞな地域社会をめざす拠点づくり』　神戸大学大学院人間発達環境学研究科 ﾋｭｰﾏﾝｺﾐｭﾆﾃｨ創成研究ｾﾝﾀｰ 障害共生部門　報告書 104-110 頁
・津田英二（2006）「支えあう人間」ﾋｭｰﾏﾝ・ｺﾐｭﾆﾃｨ創成研究センター編『人間像の発明』ドメス出版
・津田英二（2006）『知的障害のある成人の学習支援論』学文社
・津田英二（2006）「地域におけるｲﾝｸﾙｰｼﾞﾌﾞな学びの場づくりの可能性と課題」『日本社会教育・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ学習学会年報』Vol.1163-82 頁
・松岡広路（2006）『生涯学習論の探究』学文社
・松岡広路（2006）福祉教育・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ学習の新機軸『日本福祉教育・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ学習学会年報 Vol.11』万葉舎
・末本　誠　「筆跡表現の社会的広がり－知的な障害のある成人の生活表現に取り組んで－」『現代社会の「書」と未来』
・末本　誠　「伝統芸能に関する社会教育的研究・試論」　『東アジア社会教育研究』第 13 号 2008
・末本　誠　「人生の出来事（ライフイベント）と学び－〈自己〉を基軸とした〈ローカルな知〉の可能性」（日本社会教育学会編『〈ローカルな知〉の可能性－もうひとつの生涯学習を求めて』2008.10）

のびやかスペース

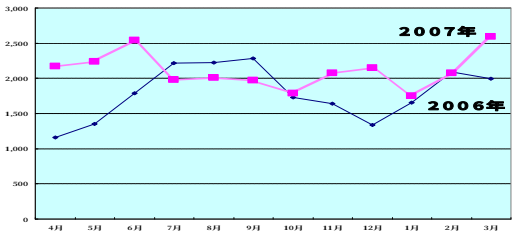
ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設で、たくさんの組織や個人が協力して、「子育て支援をきっかけにした共生のまちづくり」を目指す実践的研究の拠点です。

★みんなで支える「あーち」★
月一回発行の「あーち通信」は、利用者や学生が中心になって作成しています。

★「０歳児のパパママセミナー」★
生後５か月の赤ちゃんが１歳になるまでの８か月間、毎月１回「あーち」に集まって、月齢に応じた親のあり方を継続的に学ぶセミナーです。講師以外に、大勢の学生ボランティアが関わっています。１２月には、合同誕生会を開き、１歳になったことを皆でお祝いします。

★さまざまな活動★
産科施設と連携した「あーち」所属の助産師による家庭訪問などを中心とした「アウトリーチ」を展開しています。

2007 年度の年間利用者は、25,354 人（1 日平均約 100 人）。2006 年と比べて年間 3,864 人増（1 日約１０人増）の利用者がありました。



★ふらっと★
ふらっと（ドロップイン）は、親が子どもを遊ばせながら、親として成長していく場です。保育士さんによる「おひさまひろば・あーち（写真）」も人気のあるショートプログラムのひとつです。

★ミュージアム★
「あーち」での取組のひとつにミュージアムがあります。博物館学芸員資格のための実習も絡め、さまざまな資料展示による新しい価値の発見を目指しています。

★表現活動★
「あーち」では、多様な自己表現の支援を通して、相互の関わりを活性化しようとしています。造形・音楽・ダンスのプログラムを継続的に実施しています

★居場所づくり★
地域に居場所や関係をもちにくい人たちを特に対象とした誰でも参加して楽しめる場づくりに取り組んでいます

■住　　所: 神戸市灘区神ノ木通 3-6-18
■電　　話: 078-805-6090
■交　　通: 阪急六甲駅、JR 六甲道駅、各 15 分　　三宮、阪急王子公園駅、JR 六甲道駅から市バス「将軍通」バス停下車すぐ（灘消防署の建物の 2 階）
■開 館 日: 火曜日～土曜日(日・月・祝日は休み)
■開館時間: 10 時半～17 時(金曜日は 18 時半)
■ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ: http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-prep.html

Science Café KOBE
http://scicafe.h.kobe-u.ac.jp/record.html

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのプロジェクト研究「市民科学に対する大学の支援に関する実践的研究」の取組のひとつとして、サイエンスカフェを開催してきました。サイエンスカフェは、科学者などの専門家と市民が、カップを片手に気軽に科学について語り合う対話の場です。喫茶店、美術館・博物館のギャラリー、レストラン、酒蔵を改修した木造のホール、時にはインターネット上の仮想世界など、さまざまな場所で開催しています。

これまで神戸を中心に開催してきましたが、平成１９年度からは、広く兵庫県で開催するお手伝いも始めました（大学コンソーシアムひょうご神戸、(財)ひょうご科学技術協会主催）。

プロジェクトは、対話の場である「サイエンスカフェ」から一歩踏み出し、環境の調査や保全、科学教育など、市民の科学活動を支援する協働の場「神戸大学サイエンスショップ」へと発展しました。南あわじ市のシカの食害に対する市民の取組への支援、科学者と市民が地球温暖化に関する「IPCCレポート」を読み進める勉強会の継続的開催、中・高生が参加する月観測キャンペーンの企画・実施、地域の理科実験教室の開催支援などさまざまな取組を進めています。

サイエンスカフェ神戸　平成１９年度開催テーマ

第29回(07/04/07):「紙おむつや砂漠の緑化に　‐高吸水性ポリマー物語‐」
第30回(07/04/27):「宇宙の使い方」
第31回(07/05/27):「宇治川の清流が育む宇治茶‐日本茶のはなし‐」
第32回(07/06/29):「伊能忠敬の偉業と参考絵図」
第33回(07/07/16):「ビオトープとは?」
第34回(07/07/21):「月と流星の激しい出会い」
第35回(07/08/25):「コミュニケーションの妙と深遠」
第36回(07/10/07):「理科教科書のこれまでとこれから」
第37回(07/12/22):「おろし風‐六甲おろしと局地風のサイエンス‐」
第38回(08/01/20):「夕日の科学‐とても身近なサイエンス‐」
第39回(08/01/15):「ウミガメの将来について」
第40回(08/03/11):「超高齢者の秘密を探る」
第41回(08/03/24):「目で見てわかる歌ことばの姿」

サイエンスカフェひょうご　平成１９年度開催テーマ・場所

第1回(07/09/02):「日本でいちばん美しい赤とんぼ＝ミヤマアカネと子どもたち」（西宮市　Paris Cafe）
第2回(07/09/17):「但馬地方に影響する台風とは？」　（豊岡市 コウノトリ本舗）
第3回(07/10/28):「『なゆた』望遠鏡で宇宙人を探す」（洲本市　赤煉瓦）
第4回(07/12/02):「SPring-8でひらく科学」　（姫路市　野里の町屋 大野邸）
第5回(08/02/24):「海に生きるものたちのいま―大阪湾・瀬戸内海の生物と環境」　（明石市 RESTAURANT goya）

現代ＧＰプロジェクト「アクション・リサーチ型ESDの開発と推進」

神戸大学発達科学部、文学部および経済学部の三学部連携事業が、文部科学省が進める大学教育の充実（Good Practice）取組事業のひとつ「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択されました。（2007 年度）テーマは、「アクション・リサーチ型 ESD の開発と推進」で、持続可能な社会づくりのための教育（ＥＳＤ）をアクション・リサーチの観点から開発と推進をしようとするものです。「持続可能な社会」の構築に向け、複眼的な視野をもちつつ、実社会との相互交流を踏まえた新しい教育の創造を目指します。３年間の試行期間で、地域や企業などと協働しつつ、ＥＳＤの核となる教育プログラムを開発して行きます。

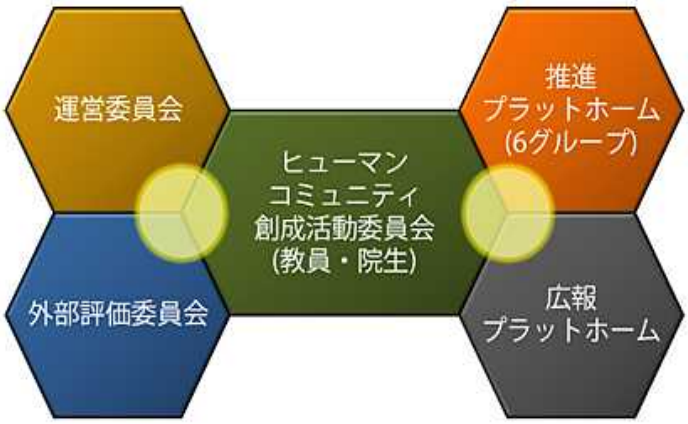
「持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）」とは

地球規模の環境破壊およびエネルギーや水などの資源保全が深刻な社会問題とされる中、これまでの大量生産・大量消費のための「開発」から、次世代も含めた世界中の人々が安心して暮らすことができる「持続可能な開発」への転換が希求されています。社会的公正の実現や自然環境との共生を重視した「持続可能な開発」を実現するためには、未来を標榜しつつ現実の課題を当事者として自覚し、行動できる人材を育成しえる教育が求められています。特に 2005 年から 2014 年までの 10 年は、「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」と定められて、各国でさまざまな取組が行われています。

大学院 GP プロジェクト「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」

神戸大学大学院人間発達環境学研究科では、地域・市民・NPO・行政・企業など、立場の異なるステイクホルダー (関係者、当事者、問題解決の主体) と連携・協働して、「人間の発達」と「市民社会の形成」を有機的に結合させた新研究領域「ヒューマンコミュニティ創成研究」に着手しています。

平成 19 年 (2007 年)、大学院 GP (大学院教育改革支援プログラム) として文部科学省より選定されたプロジェクト「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」 (平成 19〜21 年度) は、ヒューマンコミュニティ創成研究に資する若手研究者・実践者養成を目的とした新しいプログラムです。具体的には、大学院生の研究に直接関係する学術的な力量とは別に、現実の実践または研究フィールドで期待される構えや力量 (いわゆる「ヒューマンコミュニティ創成マインド」) を醸成するために、積極的に院生の正課外活動を応援しようとするプログラムです。そして、一定の量および質の活動を行った院生に対しては、正課としての修了証明 (修士号・博士号) とは別に、活動証明を与える予定です。



Annual Report 2007-2008 15

子ども・家庭支援部門
担当：伊藤　篤

itoa@kobe-u.ac.jp

2006年に引き続き、2007年度も、本研究科サテライト施設「のびやかスペース あーち」を主なフィールドとして、子育て支援の実践を通して、効果的な予防モデルの提示を目指した実証的研究を行った。具体的には以下にあげる4つの事業を中心に実践と研究を展開した。

◆当部門の基盤サービスであるドロップイン「ふらっと」

2007年度は、内容の充実を図るとともに、ネットワークの効果も見られた。内容に関しては、増加している発達障害の相談に対応できる相談員を1名、2007年11月に導入した。ネットワーキングの効果として、アウトリーチ事業（後述）を行っている産科施設からの利用者および地域子育て支援センター灘の保育士による4か月健診時での広報による利用者が増加した。2007年度（4月～3月）の「あーち」における「ふらっと（ドロップイン）」の利用者数は、親が9,054名、子どもが10,054名、合計19,102名であり（1日あたり、親37.1名 子ども41.2名）、「あーち」総利用者数に占める割合は75.9%であった。

◆次世代育成事業「赤ちゃんふれあい体験学習」

命の大切さを学ぶ機会、子育てや子育て家庭に対する肯定的な態度を形成する機会、共感性を高める機会を若者に提供するプログラムである。2007年度（5月～12月 毎月1回 8月を除く7回）には、約20名の女子中学生が参加した。このプログラムの効果は、2005年度・2006年度の検証結果とともに「2007年度神戸市委託事業報告書『いのちを実感し親になることを考える体験学習』プロジェクト（Ⅰ～Ⅲ）事業評価報告書（全143頁）」としてまとめられている。

◆ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」「１～2歳児のパパママ交流会」

上記「赤ちゃんふれあい体験学習」と対応させる形で2006年度に引き続いて実施した、月齢に応じて親としてのあり方を学ぶ「0歳児のパパママセミナー」には約30組の家族が参加した。また、2006年度および2007年度の本セミナー参加者に対する継続的支援として「1～2歳児のパパママ交流会」を2007年3月以降毎月実施している。2008年度の「0歳児のパパママセミナー」の参加家族数も約30組であり、近隣地域において本セミナーが乳児をもつ家族に定着してきたことがうかがえる。

◆産科施設と連携したアウトリーチ事業「妊娠期からの家庭支援プログラム」

2006年度に行った試行的実践で本プログラムに効果のあることが確認できたため、2007年度10月以降に雇用した「あーち」所属のアウトリーチワーカー（助産師 2名）が、産科施設を中心的なフィールドとして、相談・家庭訪問・子育て支援資源への同行参加を行った。妊娠中のニーズより産後のニーズが高く、2007年10月以降2008年3月末までに2名のワーカーが行った支援数は、産前17件・産後90件であった。

上記の諸事業に関する2007年度の研究成果は、本レポートの6・8・12ページに示す通りだが、国立女性教育会館、神戸市生涯学習センター、神戸市教育委員会等が主催するシンポジウムやセミナー等でも担当者によって紹介されている。

ヘルスプロモーション部門
担当：川畑徹朗

tetsurok@people.kobe-u.ac.jp

今日の健康課題と密接な関係がある行動に焦点を当て、人々とりわけ青少年が健康を損なう恐れの高い危険行動を避け、健康を増進する行動を主体的に選択できるようにするための方策（環境づくりと健康教育）に関する研究を行っている。

2007年度は、青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用を防止することを目指して、健全な自尊心、意志決定スキル、目標設定スキル、ストレス対処スキル、対人関係スキルなどのライフスキル（心理社会的能力）の形成を主な内容とするプログラムを新潟県、茨城県、広島県の小・中学生を対象として実施し、その有効性に関する評価研究を行った。そして、前年度に開発した中学校３年生用のプログラムを出版した。また、青少年の早期の性行動を防止するプログラム開発のための基礎的資料を得るために、埼玉県川口市の某中学校の全生徒を対象とした縦断研究を2005年度より実施し、中学生の性交経験に関わる要因を分析した。

以上のヘルスプロモーションに直接関わる研究だけではなく、兵庫県三田市教育委員会と連携して、道徳教育において健全な自尊心を育て、学ぶ意欲を高めるための共同研究にも着手し、2006年度に引き続いて2007年度も三田市内の全ての小学校５年生と中学校１年生を対象とした実態調査を実施した。また、2007年８月には教員を主な対象としたシンポジウムを開催し、青少年の健全な自尊心を育てるための取組について意見を交流した。三田市教育委員会との共同研究は2008年度も継続し、2008年７月には保護者を主な対象としたシンポジウムを開催した。

また2007年度から、新潟市教育委員会と連携し、いじめを防止するためのプログラム開発に取り組んでいる。本プログラムの土台となるのは、主任研究者が中心となって開発したライフスキル教育プログラムであり、健全な自尊心、意志決定スキル、ストレス対処スキル、対人関係スキルの形成が中心的内容となる。なお、８月には新潟市の中学校教員を対象とした、いじめ防止に関するワークショップを開催した。2008年度も継続して同様の取組を行った。

ボランティア社会・学習支援部門
担当：松岡広路

mkoji@kobe-u.ac.jp

2007年度、本部門はいくつかの大きな事業に着手した。そのひとつは、「ESDボランティア塾ぼらばん」事業である。13の阪神間のNPOおよび子ども家庭支援部門、障害共生支援部門、労働・成人教育支援部門などの協力を得て、ESDに資する青年のための新しいボランティア活動プログラムを創造しようとしている。高校生・大学生が自発性を高めつつ、多様なボランティアや市民活動の世界にふれられる仕組みを作ることが目標である。大学と地域のリソースを十分に生かす形で高校生や大学生の学びを支援するにはどうしたらよいのか、を課題としている。二期目に入る2008年度は、初年度実践の反省をふまえて、「ぼらばん方式」の確立を目指している。ひとつの団体または活動にじっくりと参加して学びを深める従来方式ではなく、多様な活動を、小グループでツアーしつつ、らせん型に学びを深めることこそが、持続可能な社会づくりのための教育（ESD）に求められる総合的な学びと当事者性・主体性の形成に有効ではないかと考えている。

本部門では、そのほか、京都府社会福祉協議会と連携して、「福祉教育実践研究隊」の組織化も行っている。福祉教育の実践者とともに研究活動を行うなかで、それぞれのフィールドへの参加活動を軸としたアクションリサーチを実施してきた。2008年度は、いよいよ成果発表を視野に入れた活動へと発展しつつある。

さらに、2007年度下半期より実施されている現代GP「アクションリサーチ型ESDの開発と推進」と大学院GP「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」の事務局も務めている。いわゆる「あれもこれも」という状況に陥っている感が強いものの、インフォーマルな教育の重要性とその活性化の仕組みづくりこそが、本部門の中心的使命である。「ぼらばん」「福祉教育研究隊」「現代GP」「大学院GP」のいずれもが重要であり、多くの部門研究員・院生・学生・スタッフに支えられて何とか推進しつつある。

2008年度下半期は、上記事業を推し進めるだけではなく、賀川豊彦献身100年神戸プロジェクトとの共催による『ESDシンポ in KOBE』を開催する予定である。ノーベル平和賞受賞者モハマド・ユヌス氏を迎えて、ESDとソーシャルワークの関係を紐といていく。今後も、事業やアクションを軸に多様な研究の場を創出しえる広場づくりを目指し、社会的ニーズに応えることのできる活動を続けていくつもりである。

労働・成人教育支援部門
担当：末本誠

suemoto@kobe-u.ac.jp

成人教育の領域は労働や職業に関する領域、福祉や健康、社会教育、農業、大学など、さまざまな形で展開している。近年、成人の学習論研究において著しい進展が見られ、成人が学ぶということについての実践・原理的な研究が可能になった。ライフストーリーの成人教育への応用は、そうした動きの一つである。本部門では、さまざまな職種にまたがった「現場」で担当者（伴奏者）として活躍している実践者の参加を得て、ライフストーリーを共通の方法論とする異業種の人々による、実践的な研究組織を作ってきた。それぞれの「現場」に応じた実践が試みられ、その途中経過や成果が研究会で報告・論議されて、また「現場」に戻された。またここでの活動は学部・大学院での教育活動と連動しており、それぞれの成果が交流・共有された。さらにここでの活動は、フランス語圏のライフストーリーの成人教育への応用を目的とした国際的な研究活動（ASIHVIF）とも連動し、末本によって例年の研究大会で報告・紹介されている。また今年度から、ESD(Education for Sustainable Development:持続可能な開発のための教育)を部門の活動の視点の一部に位置づけるようになった。今年度の具体的な活動は、次の通りである。

①末本のライフストーリーの成人教育への応用に関する研究成果の検討をした。沖縄の字誌づくりやライフ・イベント研究についての紹介を基に、その各「現場」での意義や可能性について論議した。

②龍野農業改良普及センターの事業で、団塊の世代を対象とした新規就農者のための「知る場カレッジ」での、ライフストーリーの応用を試みた。退職や転職という人生の転機を、自己の経験の振り返りとその意味の再発見を通して乗り越え、農業外で獲得した知識や問題意識を農業の世界に持ち込む可能性が探求された。

③豊岡農業改良普及センターが取り組んでいる「コウノトリ育む農法」のもつ教育的な意義の探求のため、実際に無農薬農業に取り組む農家の聞き取り調査を行った。また、豊岡市新田小学校を拠点に展開している子どもたちのプロジェクトE についての検討会を、小学校の教師と協力して開いた。

④書の社会的意義の解明に関する実践的な探究として、障害のある成人に対する書のワークショップを開催した。

⑤一昨年度の学部の演習として実施されたハンセン病回復者とのライフストーリー実践の分析と解釈の試みを行った。当日のヴィデオ映像を基に、ナラティヴな手法の持つ教育的な意味や方法論についての研究・討議を実施した。

ジェンダー研究・
学習支援部門

担当：朴木佳緒留
hounoki@kobe-u.ac.jp

「教師のためのセクハラ防止研修プログラム開発」は2007年度に３年目を迎え、まとめの報告としてブックレットを発行する準備を行った。「セクハラ防止研修」は教員には必須のものであり、受講を義務づけている自治体もあるが、一般には、いわゆる「べからず研修」となっている場合が多い。このような研修が人間理解と結びつけられることは困難であるばかりでなく、「モラルの押しつけ」と受け止められることも容易に想像できる。また、「スクール・セクハラ」は教育問題と深く関係しており、「セクハラ」一般とは異なる側面をもっている。子どもが被害者になることはもちろんのこと、加害者の立場になることもあってはならない。被害・加害の境界線は実際には判断が難しい、いわゆるグレーゾーンにあることも多い。これらの事情を勘案して、「教師のためのセクハラ防止研修プログラム開発」では、「セクハラ防止」を人権学習ないしは暴力防止のための学習と位置づけ、参加型の研修プログラムの開発に取り組んできた。2006年からの２年間は試行的実践を繰り返し、代表的なロールプレイの幾つかを設定するところまで到達した。

2007年度には「お母さんのためのゆっくり・解放プログラム」開発を立ち上げた。これは2006年度の「お母さんのための『遊々プログラム』を発展させ、子育て支援にプラスできる「ジェンダー問題学習プログラム」の開発を狙ったものである。同プログラム開発では、すでに参加型学習のファシリテーターとして活躍している市民６名が新たに学外研究員に加わり、プログラム開発に取り組んでいる（愛称ＫＡＮＡＤＥチーム）。

ＨＣセンターは地域や学外と大学をつなぐプラットフォームであり、同プログラム開発はこの目的にかなったものとなった。プログラム開発としては地味であるが、地域に根付く活動の一環となることを願っている。

神戸大学男女共同参画推進室が2007年２月に設置され、ジェンダー研究・学習部門も協力体制を取ってきた。2007年７月には、キックオフ・シンポジウムとして、神戸大学では初めての「男女共同参画シンポジウム」を開催するなど、男女共同参画推進室事業について連携した（詳細は神戸大学男女共同参画推進室ＨＰを参照して下さい）。

障害共生支援部門
担当：津田英二

zda@kobe-u.ac.jp

社会の中で生きているすべての人が排除されることなく幸福を追求できる社会づくりについて、実践的に研究・教育に取り組んでいます。中でも特に、障害のある人たちのインクルージョンのプロセスを支援することに努めています。社会的排除を受けている人たちが、社会に関わり社会の中で幸福を追求できるようになっていくためには、社会的排除を受けている本人が、排除・抑圧の存在を社会に訴えていくとともに、社会の側がそれを受け止めて変容していくという営みが不可欠です。その実現のために、次のような実践的研究を行っています。

①「のびやかスペースあーち」や、そこでのインクルーシヴな場づくりのプログラムの運営を通して、実践モデル形成の足場をつくっています。毎週金曜日の「居場所づくり」を中心に、多様な人たちが知り合い学ぶ実験的プログラムを展開し、インクルーシヴな場の展開過程の分析に力を注ぎました。「居場所づくり」は、地域における居場所をもちにくい人たちに対して、さまざまな人たちとの交流や協働への参加を支援していくというコンセプトのプログラムで、障害のある子どもたちを中心にして、集まっている人たち全員にとって意味ある場を形成しています。

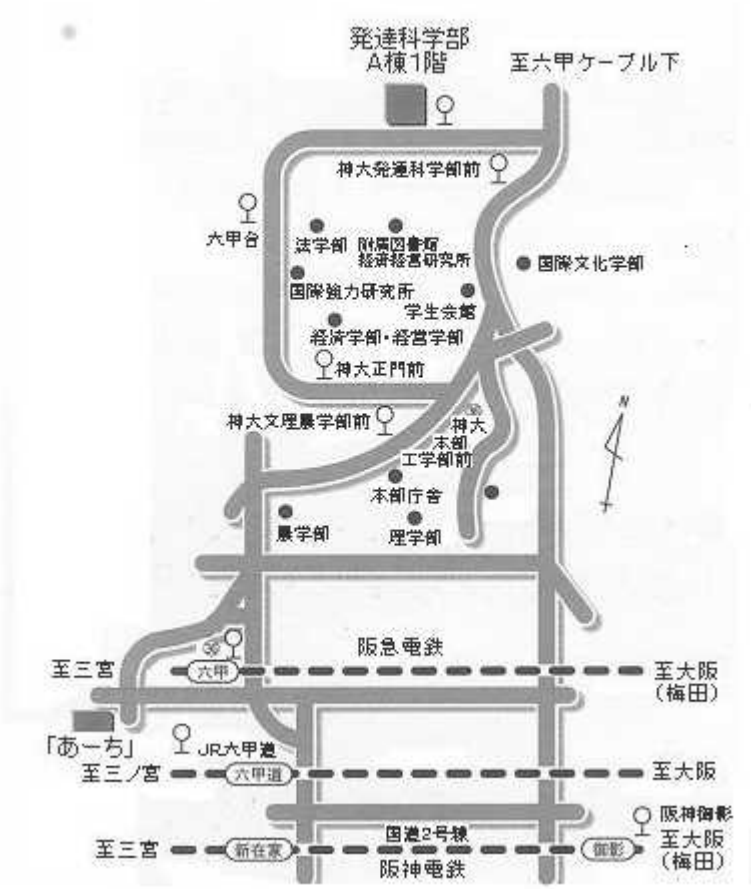
②社会的排除を受けている人たちの自己表現の支援を中心とした、多様なプログラムのためのネットワーク形成や実践を展開しています。知的障害のある成人の新聞づくり支援の他、アート、ダンス、音楽のプログラムを定期的に実施しています。

③インクルーシヴな地域社会づくりに向けた国内外の取組をつなぎ、実践・研究面で交流して相互に高めあう活動をしています。イギリスのマンチェスター大学、韓国ナザレ大学との交流を深め、２月には国際シンポジウムを実施しました。

④学内での知的障害のある人たちの就労支援と対人支援の実践的学習機会の提供を組み合わせた「みのり」プロジェクト（2008 年 4 月開始）の準備を行いました。

その他詳細は、http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda をご参照ください。

アクセス



交通案内

●阪急神戸線 「六甲」 駅、 JR 神戸線 「六甲道」 駅、 又は阪神本線 「御影」 駅から、
市バス 36 系統 「鶴甲団地」 行き乗車、「神大発達科学部前」 下車。
(阪急六甲駅から約 10 分、JR 六甲道から約 15 分、 阪神御影駅から約 20 分)

Action Resarch Center

for Human & Community Development

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

〒657-8501　兵庫県神戸市灘区鶴甲3-11

TEL：078-803-7970　FAX:078-803-7971

HC CENTER Graduate School of Human Development and Environment,Kobe University

3-11 Tsurukabuto, Nadaku,Kobe 657-8501 TEL:81-78-803-7970 FAX81-78-803-7971

ＵＲＬ　http://www.h.kobe-u.ac.jp/2141